

都市の雨水管理

米国のグリーンインフラに学ぶ

ランドスケープアーキテクト (ASLA) 小出 兼久

第5回

長雨、干ばつ……アリゾナ州では華氏最高120度(48℃)が記録され、日本でもすでに25℃以上の夏日が記録されているが、5月初旬は冷え込むと一転、連日の温度差が10℃以上ということも珍しくなかった。過去よりも気候が苛烈になっているのは、温暖化のせいだろうか。

大気科学者によれば、現在のCO₂の濃度は400ppmを恒久的に上回っているという。これは温暖化が進むことを意味する数値だが、世界2位のCO₂排出国である米国では、新体制の発定とともに環境保護局(EPA)の気候変動対策活動が縮小された。悪天候

は災害を生みやすい。気候変動が激しくなる一方だとすれば、対策が必要である。

そんな中、全米ランドスケープアーキテクト協会は最近、レジリエントデザイン(resilient design)の手引きを発売した。レジリエンス(resilience)とは回復力あるいは弾力性、耐久力などの意味を持った物理学の言葉である。従来

レジリエントデザインとは、外的ショックを受け止めてもそれまでの機能や構造、システムを維持できるように、それらを設計するあり方である。ランドスケープアーキテクトにおける外的ショックは、主に気候変動で生じる災害である。災害が起こった場合、地域社会はよりよくそれに対処して、すばやく復旧することが求められるが、レジリエントランドスケープは、そうなるために地域社会が進むべき道を提供するものである。

我々は過去、重工業中心のインフラプロジェクトによって、災害に対処してきた。洪水防止壁、ダム、下水道などのインフラは、それぞれ単一の解決策として造られたものである。しかし、今日追求することで、新しい「環境デザイン」の領域

に踏み入った。「自然と対立するのではなく、自然とともに働くこと」こそが進歩的であり方であると、気づき始めたのである。気候変動に対する最高の防御は、自然のように対応することであり、その意味で、ランドスケープアーキテクトは地域社会に対して重責を担っている。ランドスケープアーキテクトが自然と協力することで、単一ではない多層的な防御策を生み出すことが可能となる。そして、コベネフィットがもたらされる。

グリーンインフラストラクチャーは、レジリエントデザインの最先端にある。それがどのようなコベネフィットをもたらすのか、次回述べる。

「自然とともに働く」

レジリエントデザインとは、外的ショックを受け止めてもそれまでの機能や構造、システムを維持できるように、それらを設計するあり方である。ランドスケープアーキテクトにおける外的ショックは、主に気候変動で生じる災害である。災害が起こった場合、地域社会はよりよくそれに対処して、すばやく復旧することが求められるが、レジリエントランドスケープは、そうなるために地域社会が進むべき道を提供するものである。

我々は過去、重工業中心のインフラプロジェクトによって、災害に対処してきた。洪水防止壁、ダム、下水道などのインフラは、それぞれ単一の解決策として造られたものである。しかし、今日追求することで、新しい「環境デザイン」の領域

に踏み入った。「自然と対立するのではなく、自然とともに働くこと」こそが進歩的であり方であると、気づき始めたのである。気候変動に対する最高の防御は、自然のように対応することであり、その意味で、ランドスケープアーキテクトは地域社会に対して重責を担っている。ランドスケープアーキテクトが自然と協力することで、単一ではない多層的な防御策を生み出すことが可能となる。そして、コベネフィットがもたらされる。

グリーンインフラストラクチャーは、レジリエントデザインの最先端にある。それがどのようなコベネフィットをもたらすのか、次回述べる。

筆者：小出兼久(こいで・かねひさ) NPO法人日本ゼリスケープデザイン研究協会(JXD A)代表理事
備考：記事詳細はJXDA(<http://xeriscape.jp.org>)の環境新聞+コラム資料参照

(次回に続く)

レジリエントデザインとグリーンインフラストラクチャー(1)



レジリエントデザインによるアントワープのグランドシャムパーク。郊外と都市を結びつけ、水と我々の関係性を問う新しいアイデンティティを持った公園である

持てるように、それらを設計するあり方である。ランドスケープアーキテクトにおける外的ショックは、主に気候変動で生じる災害である。災害が起こった場合、地域社会はよりよくそれに対処して、すばやく復旧することが求められるが、レジリエントランドスケープは、そうなるために地域社会が進むべき道を提供するものである。

我々は過去、重工業中心のインフラプロジェクトによって、災害に対処してきた。洪水防止壁、ダム、下水道などのインフラは、それぞれ単一の解決策として造られたものである。しかし、今日追求することで、新しい「環境デザイン」の領域

に踏み入った。「自然と対立するのではなく、自然とともに働くこと」こそが進歩的であり方であると、気づき始めたのである。気候変動に対する最高の防御は、自然のように対応することであり、その意味で、ランドスケープアーキテクトは地域社会に対して重責を担っている。ランドスケープアーキテクトが自然と協力することで、単一ではない多層的な防御策を生み出すことが可能となる。そして、コベネフィットがもたらされる。

グリーンインフラストラクチャーは、レジリエントデザインの最先端にある。それがどのようなコベネフィットをもたらすのか、次回述べる。

筆者：小出兼久(こいで・かねひさ) NPO法人日本ゼリスケープデザイン研究協会(JXD A)代表理事
備考：記事詳細はJXDA(<http://xeriscape.jp.org>)の環境新聞+コラム資料参照

(次回に続く)

筆者：小出兼久(こいで・かねひさ) NPO法人日本ゼリスケープデザイン研究協会(JXD A)代表理事
備考：記事詳細はJXDA(<http://xeriscape.jp.org>)の環境新聞+コラム資料参照